

## 高校生の職業意識：建設関係の興味と希望は？

吉本，圭一  
雇用職業総合研究所研究員

<https://hdl.handle.net/2324/18530>

---

出版情報：つち. 13 (8), pp.4-9, 1989-08-01. 雇用促進事業団  
バージョン：  
権利関係：

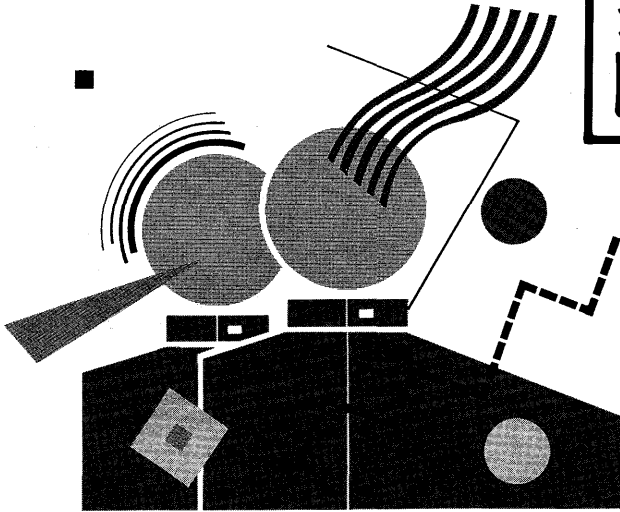


特集

# 高校生

# 職業意識の

■建設関係の興味と希望は？



雇用職業総合研究所研究員

吉本圭一

若者は「新人類」？

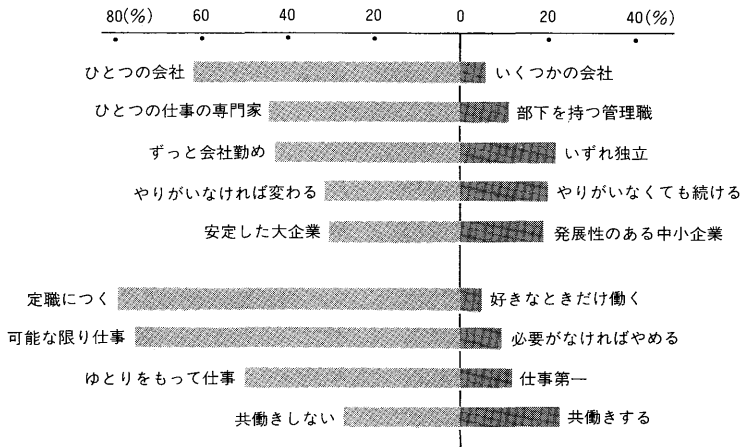
若者の職業への取り組みを評して、「新人類」というレッテルが造られ、なかば常識化している。今いる職場に積極的なアイデンティティをもたず、究極の適職を求めて、ちよつと嫌になると職を転々とし、なかなか一人前の職業人にならない。他方では、それどころか最初から組織に入るつもりのないフリーアルバイターまで出現している。とても「旧人類」の大人には理解できない問題症候群のひとつである。

しかし、職場に定着しない若者のメンタリティーをとやかく論ずる前に、その背景としての就職あつ旋の仕組みや企業の中での仕事の現実についても理解しておく必要がある。例えば、高校生などが在学中に考えていた職業のイメージや希望と、実際に就職した仕事とのズレという問題も大きいだろう。

「高校生調査」の  
ねらいと方法

学校の進路指導においても、職業キャリアや職業生活についての希望がどう形成され、

図1 職業生活・キャリアの希望



そして実際どう職業を選択するのかがというプロセスに目を向けることが重要であり、求人者や行政の働きかけについてもそれらとの関連で考えることができる。

そこで、雇用職業総合研究所では、一九八五年から「高校生の職業希望に関する研究」として、高校生の職業意識の形成と、それに

かかわる学校や家族の情報提供・指導の影響について継続的な調査を実施してきた。この特集では、高校在学中の結果の概要を紹介し、また建設業に関係する興味や希望についてのポイントを抜きだしてみたい。

この調査対象は、労働市場の特性をもとに選んだ全国六地域の、高校二・三校の高校生であり、継続調査の対象者は第一回調査時点での一年生、各校二クラス以上とした。調査は、第一回（一年生）を一九八五年六月七月に実施し、そのあと第二回（二年生）、第三回（三年生）と毎年同じ時期に同じ対象者を追跡調査し、卒業時の進路も把握した。分析対象は、第一回から第三回まで全調査への有効回答者二二一九名である。

### 高校生の職業キャリア観と職業希望

#### ■ 1 ■ 職業キャリア観

職業の世界が大きくゆれ動くなかで、「新人類」などとレッテルをはられる若者は、どのような職業キャリア・職業生活を送ろうとしているだろうか。図1のように、①職種・離転職などにかかわる職業キャリアについては、大企業にはいり、やりがいなければ転

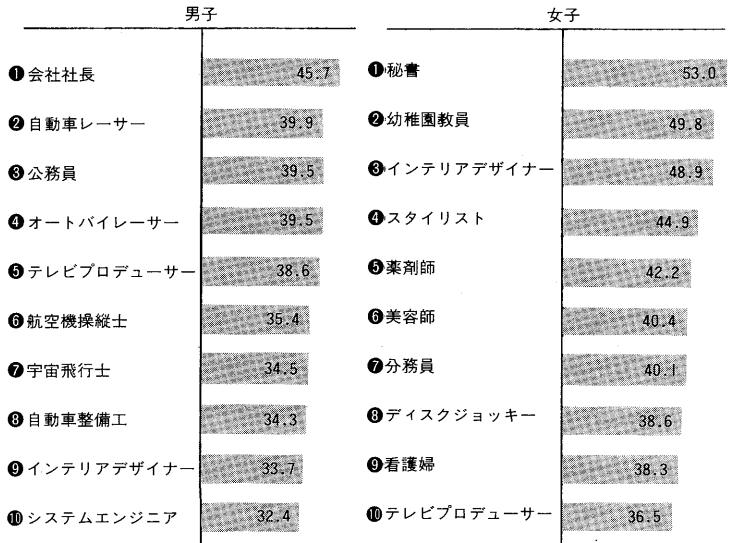
職するが、ひとつの仕事の専門家として、できればひとつの会社ですつとサラリーマン生活を送るといのが、高校生たちが希望の多数派パターンである。また、②仕事の仕方とか職業生活といったライフスタイルにかかわるところでは、さすがに好きなどきだけ働き、必要がなければ仕事はやめてしまうというフリー志向とか職業離れの若者はごく例外的である。他方、仕事第一というわけではなく、ゆとりをもってのんびりとやっていきたいということになる。働き蜂の企業戦士志願はさすがに少ないが、職業キャリアについては、大人たちの意識や現実とはほとんど差がなさそうである。

ちよつと意外なのは、共働きについてである。全体では肯定派・否定派が同じくらいに分かれているが、男女差が大きい。女子では肯定派が三五%もいるのに対して、男子ではわずか一三%にすぎない。さらに、女子の方が共働き希望が多いとはいえ、結婚してまで仕事をしようとは考えない否定派の女子も二六%いる。今日の女性の職場進出の流れとは落差があるように見えるのだが、皆さんはどう感じだろうか。

#### ■ 2 ■ やまざまな職業への興味

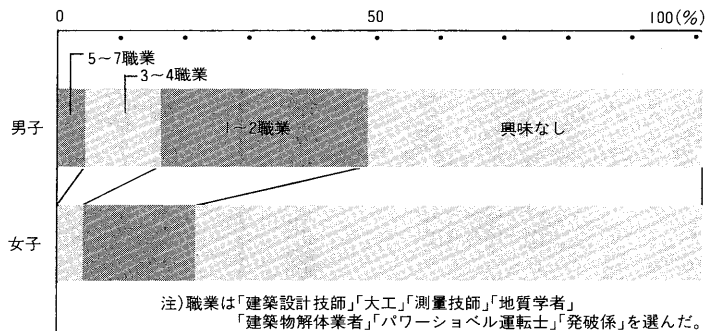
人々がそれぞれ職業につく前には、夢や願

図2 興味ある職業・男女ベスト10



注) 提示された160職業の中での順位  
単位：(%)

図3 建設関連の7職業への興味



注) 職業は「建築設計技師」「大工」「測量技師」「地質学者」「建築物解体業者」「パワーショベル運転士」「発破係」を選んだ。

望から現実的な見込みまでの間で、いくつかの職業に興味・関心をもつ。高校生の職業への興味を、ここでは一六〇の職業(VPI職業興味検査の職業)について調べた。

図2に示すように、男子高校生の多くが興味をもっている職業は、トップが会社社長(四六%)であり、以下公務員、オートバイレーサー、テレビプロデューサー、航空機操縦士などとつづく。女子では、秘書の五三%を筆

頭に、幼稚園教員、インテリアデザイナー、スタイリスト、薬剤師、美容師などとなっている。どちらかといえば、男子では「職業の夢」という形で可能性の比較的低い職業への興味をさまざまにもち続けているのに対して、女子では、現実には女子の就業の可能性の高い職業に興味を集中している。

ここで建設業に関連するような職業についての興味をみると、男子で、建築設計技師が

二八%で一六番目に位置しているほか、大工(一八%)、測量技師(一七%)、地質学者(一五%)、建築物解体業者(二三%)、パワーショベル運転士(二二%)、発破係(五%)となっている。女子では、これらの職業への興味は低くなっている。建設関連としてまとめると、図3のように、男子高校生の半数は、これらの七職業のどれか少なくとも一つには興味をもっており、三つ以上の職業に興味をもっている者も一六%いる。

みんなが職業への興味と実際の仕事を一致させようとするわけではないが、潜在的には、建設の仕事への候補者のプールはそれなりに大きいと考えることができるだろう。

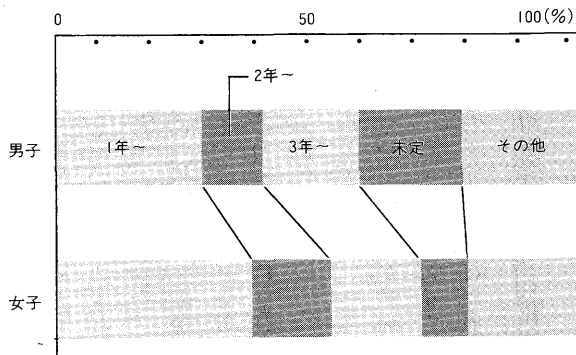
### 3 職業希望の形成

#### ① 職業希望の決定状況

このように職業生活のイメージ・展望をかたち造り、またさまざまな職業に興味をもちながら、つぎの段階で、自分が就きたい職業を具体的にどれかひとつ選択することになる。一年生時点から一貫して就きたい職業がある高校生は三三%であり、逆に、高校生の一五%は、三年間ずっと就きたい職業が見つからないままである。また、一年の頃の希望が二、三年になって消えた者もある(図4)。

性別で見ると、女子の方が希望を早い段階で

図4 職業希望形成のパターン

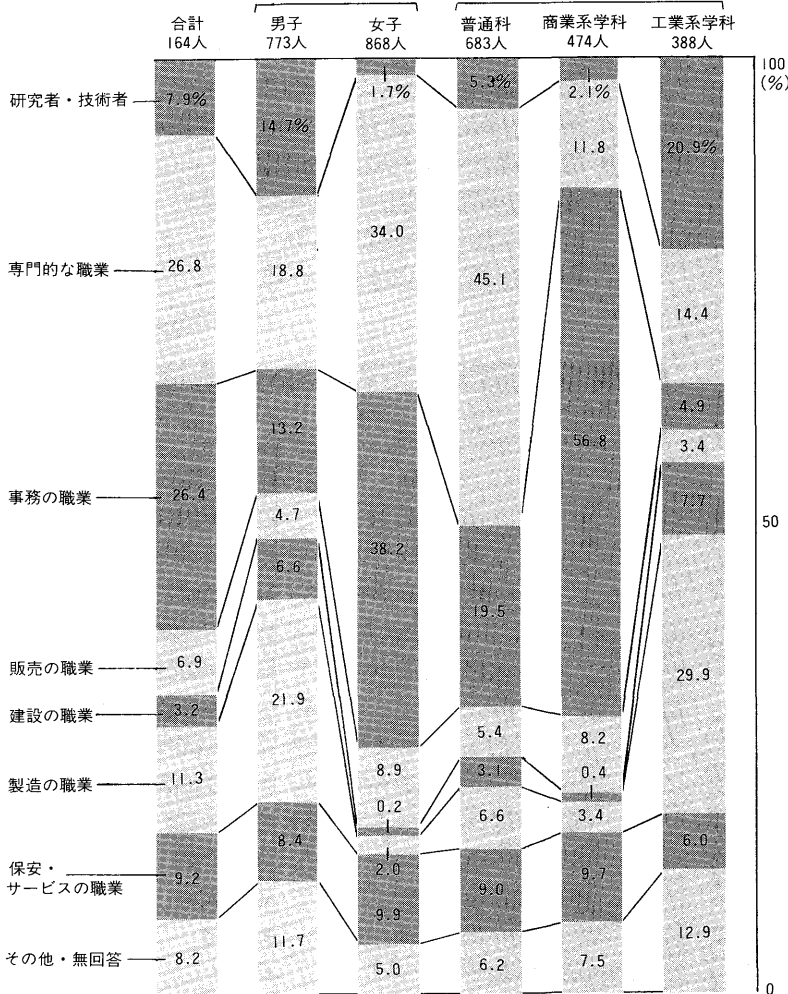


注) 1,2,3年各年次の「就きたい職業」決定状況によるパターン

②希望職種とその変化  
 希望を決めている者の職種は、図5のように、男子では製造の職業二〇%、専門的な職業一九%、研究者・技術者一五%が多く、そ

決めており、男子では希望形成がおそく、三年間ずっと希望が決まらなかったという者が二〇%いる。このように男子で職業希望の形成の遅いことは、職業への興味がいろいろと夢のように広がっていることと関係しているが、就職をいよいよ間近に控えている者も多

図5 性別・学科別の希望職種



れ以外にも分散しているが、女子では事務職三八%と専門的な職業三四%にかたまっている。ここで、建設関係の職業については、男子の七%が希望しており、これに研究者・技術者の中の建設技術者、設計技術者なども加味して考えてみると、まずまずの希望者が集まっている。

学科別にみると、普通科では専門・技術職志向が強く、専門的な職業四五%、研究者・技術者五%の希望があり、この傾向は特に女子で強い。商業科では事務職希望が五七%と多く、販売の職業を希望する者はあまり多くない。工業科で多いのは、製造の職業が二〇%、研究者・技術者が二二%などであり、専

門的な職業についても一四%の希望がある。

次に、希望の職種が一年時から三年時にかけてどう変化したか、一年時の希望職種別(図5の分類と異なり、自由回答をアフターコードしたもの)に三年時の同一職種希望の比率をみると、図6のようにもつとも高い事務職と専門技術職の希望者でそれぞれ六一%、逆に低いのは、公務員希望者の二八%、販売職希望者の三三%などであり、一年時の希望職種を取り下げている高校生が多い。

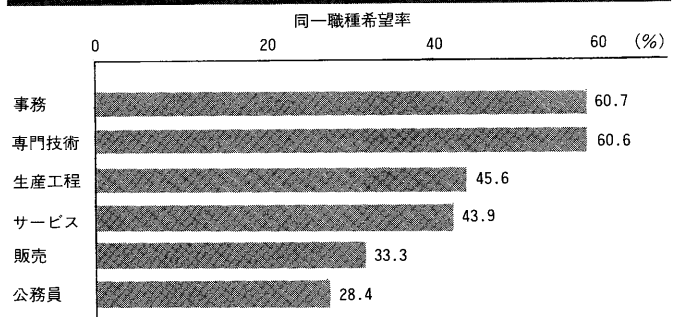
このように、三年生になるまで、高校生たちの職業希望は確定せず、揺れ動いている。

#### ■4 ■ 高卒進路の実現可能性と対応

調査対象者の高校在学中の数年は、円高不況で高卒採用の手控えが著しかった。こうした環境のなかで、高校生たちはいろいろな進路の実現可能性をどうみていたのだろうか。

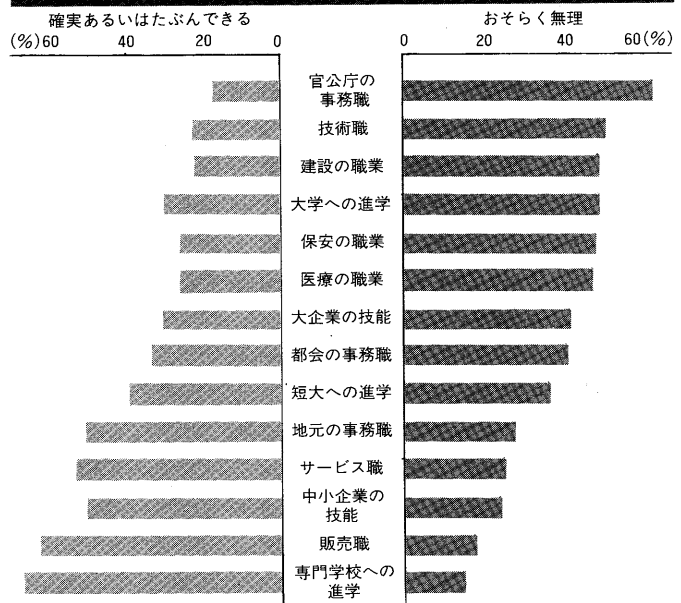
図7は、「興味・関心があるかどうかは別として、もし高校卒業後次のような進路を希望したら、どの程度実現の可能性があると思いますか」という質問への回答である。「おそらく無理」という回答が多い順に、「官公庁の事務職」(二八五%)を筆頭に「技術職」「大学への進学」「建設の職業」「医療の職業」「保安の職業」なども半数の高校生がおそらく無理と答えている。官公庁・技術職・大学などは選

図6 1年と3年の希望職種的一致と変化



注) 第1希望の一致をみたもの

図7 高卒進路の実現可能性



抜の厳しい進路であり、これに対して、建設・医療・保安などは職種に性別の偏りがあったり、適性が強く影響する進路ということである。逆に、比較的容易な進路と見られているのは、専修学校・販売職・地元事務職・中小企業の生産工程職などである。

なお、不況下でなお求人が多かった建設関係の職業への実現が「無理だろう」と考えるものが多いが、これを性別や学科別の比較で考えてみよう。性別では、女子で六八%が無

理だろうとしているが、男子でもそう思っているのが三五%いる。さらに、学科別でも普通科・商業科でそれぞれ六割近くが無理だろうと考えており、工業科で実現可能性が高くと考えられているとはいえず、それでも三〇%は「無理だろう」と答えている。工業科でも、建築とか土木以外の学科の高校生には、建設業

はまだ「遠い存在」なのではあるまいか。

また、希望の就職が難しそうならばあいどうするかを聞いてみると、図8のように、希望

図8 希望どおりの就職が難しそうなどときの対応

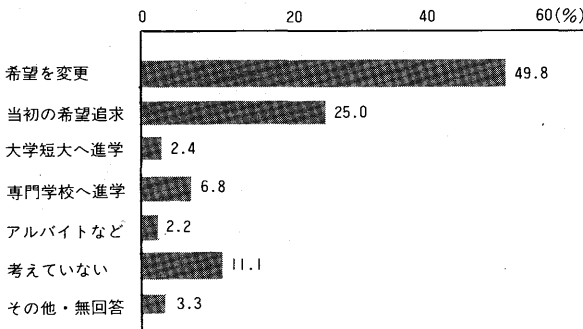
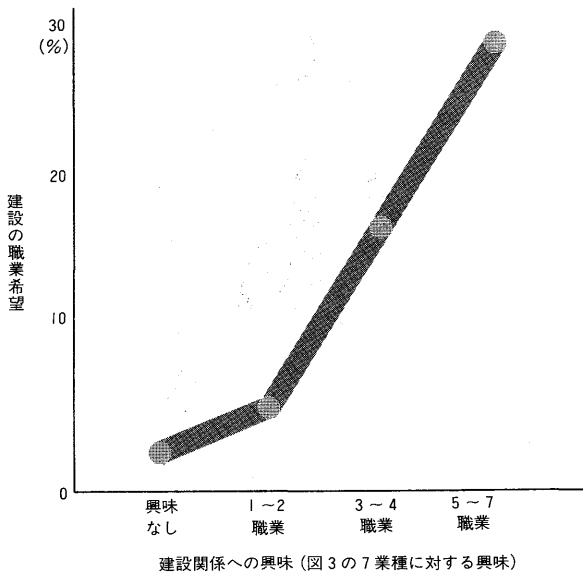


図9 建設関係への興味と希望



建設業への興味と希望の差

を変更して就職するという者が半数であり、一部には専修学校などへの進学への変更（九〇）も考えていることがわかる。さらに、あくまで当初の希望どおりの就職先をさがすという者も二五％あり、こうした中から就職できず無業という進路をとるものもいるだろうが、この点は現在彼らの高卒後の初期キャリアを追跡調査しているところである。

最後に、まとめに代えて建設業関係の興味と希望とを振り返ってみよう。建設業への興味は、男子の半数近くにあるが、実際の職業希望に上がってくるのは希望職種が決まった者の一割弱である。

興味と希望の関係を图示してみると、図9のように興味と希望の関係は明白であり、興味の職業が多いほど、実際に建設関係の仕事を選び多く選択している。建設関係の5職業以上に興味をもっている高校生のほぼ三人に一人が「建設の職業」を希望している。つまり、興味と希望とは差があるのは当然

で、いくつかの興味のある職業の中から、各人の適性とか実際の可能性とかの多面的な判断をしてどれか具体的に自分のつく職業を選択するからである。それぞれの職業に多くの希望者が集まるために、まず前提となるのは興味のレベルであり、今後、建設業の「仕事の面白さ」についてのPRをより充実させることが大切であろう。

ただし、建設業での興味と希望の落差の要因として、これまでの結果から注意しておきたいのは、建設の職業への高卒就業可能性が意外に低く見られていることである。彼らの見通しと同様、現実の就職でも、男子の工業科、それも建築とか土木とかの特定の関連学科からしか、建設業の技術関係への就職のコースが開かれていないことの問題がかかわっていると考えられる（吉本圭一「高卒者の建設業就職への途」『つち』一九八九年二月号を参照）。採用する側も、どんな高卒者を集めるのか検討して、情報の提供の範囲をもう少し広げてみてはいかがだろうか。